

<巻頭言>



新年を迎えて

藤井敏夫*

新年明けまして、おめでとうございます。会員の皆様には、佳いお年を迎えられましたことと、心からお慶び申し上げます。

昨年も色々なことがありましたが、まずは、ご退任の黒田前会長はじめ前役員の皆様の功績に対し、深く感謝申し上げますとともに、新留任の役員ならびに会員の皆様のご活躍に対し、厚く御礼申し上げます。

また国の動きについては、年頭早々に首相が代わり、秋には長らく待たれた衆議員の解散、総選挙が行われるなど、政治は目まぐるしく動きましたが、経済の方は期待されたほどの景気回復も見られず、緩慢低迷の1年でありました。こうして年が改まれば、例年のことながら、政治の安定、経済の復調、そして民生の安寧が、あらためて切望されます。

年の初めに身近を見回して、最も身近な水について思い返してみますと、昨年また渇水が報じられ、地域によっては使用制限となりました。ひでりが続いてダム湖底が現れますと、TVは決まったように亀甲模様を映し出し、水不足を世に訴えます。これを見ては誰も、水の有り難さが身に沁みてまいりましょう。

ここに、一般向けながら一つの統計があります（日本経済図説・第二版1996宮崎勇著）。その中の水資源の項をめくると、過去100年ほどの図表から年降水量は、平均で大凡1,650耗、経年変化（回帰直線）では年間ほぼ1耗の減、といった値が読み取れます。さらに、人口1人当たりの年降水量が、5,300立米ほどで米国の2割にも満たないといった趣旨の記述も見られます。

統計の厳密な検証は措くとして、資源に乏しい我が国では、水は矢張り貴重な資源に違いありません。屢々、指摘されるところであります。水の適切な使用や有効な再利用とともに、水資源の開発が望まれる所以でありましょう。

いま、貴重な水資源を開発するために（多目的）、ダムが造られております。同時に地球の裏側でも貴重な鉱物資源を開発するために（結果）、ダムが造られております。貴重

* (株)日本大ダム会議 会長

な資源を開発するために、ダムが大きな役割を果しておりますのは言うまでもありません。

昨年の ICOLD 年次例会（サンチャゴ）の折りのシンポジウムでは、お国柄、4 テーマのうち3つが、「鉍滓ダム」に関するものでありましたが、そこは何しろ世界最大の銅産出国であります。年間、2百トンを超える選鉍の結果、鉍滓は2億トン以上にもなり、その堆積処分のために、ダムが造られております。地域と材料の特性から、特に耐震と環境の問題について、それぞれ研究が進められております。

このように、貴重な資源を開発し、人々の生活向上を目指して、ダムは多くの国々で、その必要と実情に応じて、様々に造られております。そして、ダムの安全と環境については、これからも色々な工夫が凝らされていくことであらうでしょう。

ダムの安全は、その発達の過程を通じ、長年にわたり研究が続けられておりますが、それに比べ、ダムと環境の問題は、まだ歴史も浅く、今後の展開が極めて重要であるとは言うまでもありません。貴重な資源の開発を進めるダムが、仮にも、環境の問題で停滞するようにでもなれば、それこそ大きな矛盾であり、発展への道が閉ざされてしまうことにもなりかねません。

この数十年、資源・環境・開発は、世界の未来を占うキーワードとなっておりますのは、よく知られるところであります。嘗てのローマ・クラブの「成長の限界」から、近くは、国連の「持続可能な開発」や「アジェンダ21」をもって、世界に向けて資源への警告が發せられ、また、世界を挙げて環境への行動計画が合意されて来ましたのも、周知のことです。

こうして、科学技術の著しい進歩発達に促された今世紀の急激な開発も、資源と環境の両面から軌道修正を余儀なくされ、持続可能な開発への転換が求められております。それは、とりもなおさず、資源の開発に係わるものの目指すところに外なりません。

年の瀬に土石流による災害が報じられましたので、安全について、一言申し添えさせて頂きます。先の大震災に続いて、昨年にもトンネル崩壊、そして土石流と、大掛かりな災害が相次いで発生しております。この種の自然との接点にあっては、予測の起点は、経験的予感に恃むところが少なくありません。自然は、時に人知を凌ぐ厳しさをも露にしますから、現場の安全には、経験の蓄積と洞察力の錬磨がとりわけ肝要と得心いたします。

新年を迎えるに当たり、まず安全、そして会員の皆様の一層のご活躍と、本会の今後の発展を併せ祈願申し上げまして、年頭のご挨拶といたします。